淡江大學日本語文學系

和洋女子大學言語・文學系日本文學研究室

2009年日本近代文學・語學・文化國際學術研討會

# —漱石在台灣—

# 會　議　手　冊

主辦單位：淡江大學日本語文學系
和洋女子大學言語・文學系日本文學研究室
協辦單位：台灣日本語文學會
贊助單位：教育部
會議時間：2009年9月19日
會議場所：淡江大學 淡水校園

# 會議手冊目次


一、会議議程…… 1

二、会議内容…… 3

三、議事規則…… 4

四、演講大綱

漱石の生きた空間
—早稲田・神楽坂をめぐって—…… 木谷　喜美枝 5

五、論文壁報発表大綱

1. 『夢十夜』「第十夜」における異界
—宮崎駿映画との比較—…… 王　薇婷 14
2. 『それから』と『門』の試論
—両作品の結末から見た主人公たちの選択—…… 賴　信安 22
3. 交通機関の歴史から見る漱石文学
—前期三部作を中心に— …… 巫　文嘉 29
4. 漱石文學における「絵画」の意味
—『三四郎』から見て— …… 林　慧雯 37
5. 『彼岸過迄』における海外進出への夢想と実行について…… 林　子玲 45
6. 『三四郎』における三角関係—美禰子の考えを中心に—…… 何　浩東 53

六、論文口頭發表大綱

1. 海を渡る感覚—漱石の留学をめぐって— …… 岡本　文子 61
2. 横光利一と夏目漱石—韓国旅行を中心として—…… 李　錦宰 69
3. 夏目漱石における朝鮮—朝鮮人モ居ル是モスキダ—…… 仁平　道明 77
4. 漱石と近代日本語…… 岩下　裕一 96
5. 夏目漱石『坊っちやん』のストーリー構成
—語りにおけるメタ・テクストとテクストとの交響—…… 落合　由治 103
6. 夏目漱石の「翻訳」に関する言説の一考察
—『坪内博士と「ハムレツト」』をめぐって—…… 王　佑心 111
7. 『夢十夜』の「第八夜」における運命の構図…… 彭　春陽 119
8. 『吾輩は猫である』第八章に見る苦沙弥の「逆上」
—金銭の力を軸に—…… 林　寄雯 126
9. 志賀直哉「いたづら」論
—漱石「坊っちやん」に触れつつ—…… 黄　如萍 134

10. 夏目漱石と漢文学…… 鳥羽田　重直　142
11. 夏目漱石の詩と画―中国の文人の投影―…… 范　淑文　150
12. 漱石文学における「風」の形象
―初期作品『吾輩は猫である』と『漾虚集』を中心に―… 曾　秋桂　158
13. 夏目漱石『三四郎』試論―三四郎の「矛盾」の行方―…… 頼　雲荘　166
14. 「静」の姿と心
―『こゝろ』における男性本位と人物造形―…… 顧　錦芬　174

七、演講者・発表者簡歴…… 182

八、主持人・評論人簡歴…… 183

九、籌備委員名單…… 184

十、工作人員名單…… 186

十一、淡江大学日本語文学系簡介（中文版・日文版）…… 187

十二、和洋女子大学文学語学系日本文学研究室紹介…… 189

十三、台湾日本語文学会簡介（中文版・日文版）…… 190

# 『夢十夜』の「第八夜」における運命の構図

淡江大学　副教授

彭　春陽

## 1．問題提起

夏目漱石の『夢十夜』は明治41年7月25日から8月5日まで『朝日新聞』に連載された作品である。発表された当時から1948年までの40年間は、研究対象としてさほど重要視されていなかった。1949年に伊藤整の論や荒正人の』論が出た後、両氏の論点を踏まえながら、徐々に『夢十夜』論が現れてきた。大空社出版の『夏目漱石「夢十夜」作品論集成』によると、1994年の時点には、すでに230編を超えるという[1]。筆者も1997年に「夏目漱石の『夢十夜』試論――「第八夜」に隠されたサイコロの構図――」という拙論を台湾日本語文学会の会誌に掲載させていただいた。今回はそれを踏まえて、「第八夜」における運命についてのことを、もう一度考え直そうとする。

## 2．「第八夜」の本文

「第八夜」を電子版「青空文庫」より以下のように引用する。

床屋の敷居を跨（また）いだら、白い着物を着てかたまっていた三四人が、一度にいらっしゃいと云った。

真中に立って見廻すと、四角な部屋である。窓が二方に開（あ）いて、残る二方に鏡が懸（かか）っている。鏡の数を勘定（かんじょう）したら六つあった。

自分はその一つの前へ来て腰をおろした。すると御尻（おしり）がぶくりと云った。よほど坐り心地（ごこち）が好くできた椅子である。鏡には自分の顔が立派に映った。顔の後（うしろ）には窓が見えた。それから帳場格子（ちょうばごうし）が斜（はす）に見えた。格子の中には人がいなかった。窓の外を通る往来（おうらい）の人の腰から上がよく見えた。

庄太郎が女を連れて通る。庄太郎はいつの間にかパナマの帽子を買って被

[1] 坂本育雄編『近代文学作品論叢書　夏目漱石「夢十夜」作品論集成Ⅰ』東京：大空社、1996。16頁。

（かぶ）っている。女もいつの間に拵（こし）らえたものやら。ちょっと解らない。双方とも得意のようであった。よく女の顔を見ようと思ううちに通り過ぎてしまった。

豆腐屋（とうふや）が喇叭（らっぱ）を吹いて通った。喇叭を口へあてがっているんで、頬（ほっ）ぺたが蜂（はち）に螫（さ）されたように膨（ふく）れていた。膨れたまんまで通り越したものだから、気がかりでたまらない。生涯（しょうがい）蜂に螫されているように思う。

芸者が出た。まだ御化粧（おつくり）をしていない。島田の根が緩（ゆる）んで、何だか頭に締（しま）りがない。顔も寝ぼけている。色沢（いろつや）が気の毒なほど悪い。それで御辞儀（おじぎ）をして、どうも何とかですと云ったが、相手はどうしても鏡の中へ出て来ない。

すると白い着物を着た大きな男が、自分の後（うし）ろへ来て、鋏（はさみ）と櫛（くし）を持って自分の頭を眺め出した。自分は薄い髭（ひげ）を捩（ひね）って、どうだろう物になるだろうかと尋ねた。白い男は、何（な）にも云わずに、手に持った琥珀色（こはくいろ）の櫛（くし）で軽く自分の頭を叩（たた）いた。

「さあ、頭もだが、どうだろう、物になるだろうか」と自分は白い男に聞いた。白い男はやはり何も答えずに、ちゃきちゃきと鋏を鳴らし始めた。

鏡に映る影を一つ残らず見るつもりで眼を（みは）っていたが、鋏の鳴るたんびに黒い毛が飛んで来るので、恐ろしくなって、やがて眼を閉じた。すると白い男が、こう云った。

「旦那（だんな）は表の金魚売を御覧なすったか」

自分は見ないと云った。白い男はそれぎりで、しきりと鋏を鳴らしていた。すると突然大きな声で危険（あぶねえ）と云ったものがある。はっと眼を開けると、白い男の袖（そで）の下に自転車の輪が見えた。人力の梶棒（かじぼう）が見えた。と思うと、白い男が両手で自分の頭を押えてうんと横へ向けた。自転車と人力車はまるで見えなくなった。鋏の音がちゃきちゃきする。

やがて、白い男は自分の横へ廻って、耳の所を刈（か）り始めた。毛が前の方へ飛ばなくなったから、安心して眼を開けた。粟餅（あわもち）や、餅やあ、餅や、と云う声がすぐ、そこでする。小さい杵（きね）をわざと臼（うす）へ



あてて、拍子（ひょうし）を取って餅を搗（つ）いている。粟餅屋は子供の時に見たばかりだから、ちょっと様子が見たい。けれども粟餅屋はけっして鏡の中に出て来ない。ただ餅を搗く音だけする。

自分はあるたけの視力で鏡の角（かど）を覗（のぞ）き込むようにして見た。すると帳場格子のうちに、いつの間にか一人の女が坐っている。色の浅黒い眉毛（まみえ）の濃い大柄（おおがら）な女で、髪を銀杏返（いちょうがえ）しに結（ゆ）って、黒繻子（くろじゅす）の半襟（はんえり）のかかった素袷（すあわせ）で、立膝（たてひざ）のまま、札（さつ）の勘定（かんじょう）をしている。札は十円札らしい。女は長い睫（まつげ）を伏せて薄い唇（くちびる）を結んで一生懸命に、札の数を読んでいるが、その読み方がいかにも早い。しかも札の数はどこまで行っても尽きる様子がない。膝（ひざ）の上に乗っているのはたかだか百枚ぐらいだが、その百枚がいつまで勘定しても百枚である。

自分は茫然（ぼうぜん）としてこの女の顔と十円札を見つめていた。すると耳の元で白い男が大きな声で「洗いましょう」と云った。ちょうどうまい折だから、椅子から立ち上がるや否や、帳場格子（ちょうばごうし）の方をふり返って見た。けれども格子のうちには女も札も何にも見えなかった。

代（だい）を払って表へ出ると、門口（かどぐち）の左側に、小判（こばん）なりの桶（おけ）が五つばかり並べてあって、その中に赤い金魚や、斑入（ふいり）の金魚や、痩（や）せた金魚や、肥（ふと）った金魚がたくさん入れてあった。そうして金魚売がその後（うしろ）にいた。金魚売は自分の前に並べた金魚を見つめたまま、頬杖（ほおづえ）を突いて、じっとしている。騒がしい往来（おうらい）の活動にはほとんど心を留めていない。自分はしばらく立ってこの金魚売を眺めていた。けれども自分が眺めている間、金魚売はちっとも動かなかった。